

## 若葉の映える唐招提寺にて

藤原 道夫

すんでのところでバスを逃し、タクシーで唐招提寺に向かう。4月22日9時前だった。寺に近づく頃に運転手とやりとり。「寺は開いてるでしょうね」「開いてますよ」「けいか（瓊花）はもう咲いてますかね」「いや、未だじゃないですか」

寺は開いていた。境内に入ると、静寂な雰囲気ですっぱり包まれる。人声が全く聞こえてこない。さくさくした音を耳にしながらか利道をすすむと、天平の豊に飾られた屋根が迫ってくるよう。屋根の両端は若葉の中にかくれている。

まずは金堂の仏さんを拝む。右手東方に薬師如来立像、中央（南方）に廬舎那仏坐像（釈迦の本地仏）、左手西方に千手観音立像（阿弥陀の慈悲の象徴）が祀られている。このような配置は古寺によくみられるようだ。古色蒼然としたたたずまいの大きな仏さんにひたすら祈りをささげる。北側にある講堂内の弥勒如来坐像も拝観し、校倉造の経蔵や鼓楼を眺めてから鑑真和上御廟に向かう。途中芭蕉の句碑をしみじみ見入る、馬酔木の花が寄りそっている。

石段を登って木陰の道を行き左手に曲がると、木漏れ日を受けてまばゆく映える苔の緑が目にとび込んできた。御廟は若葉にかこまれてひっそりとたたずんでいる。元の道に戻り、開山堂に祀られている「鑑真和上身代わり像」をしげしげ拝観した。

御影堂の塀の下にさしかかると、立て札の白い紙に大きく**瓊花**と書いてあり、赤い矢印で行き先が示されている。瓊花のことは忘れかけていた。「咲き始めたのかな」とつぶやきながら小さな門への石段を登る。土塀を過ぎると御影堂脇の「供華園」というところに出た。高さ3mほど葉の茂る木に白い花が沢山咲いている。これこそ和上が好んだ瓊花だ！ 一塊の花冠はガクアジサイを小型にしたよう、5弁の花（実は萼）が8つで輪をつくり、中につぶつぶしたもの（花のつぼみ）が沢山ある。鼻を近づけると微かに香りがした。見守り役のおばさんが近づいてきて別の花冠を指し「こちらのほうが香りますよ」という。見ると花冠のつぶつぶがはじめて毛羽立っている。ふくよかな香りが立ち昇ってきた。瓊花は中国揚州市の名花で門外不出とされているとか。和上寂滅後1,200年を記念し、揚州市の大明寺（かつて鑑真和上が戒を授けていた）から中国仏教協会をとおしてここに贈られた。

戒壇の南に開けた薬草園を見学、背丈4、5mほどの瓊花が1本立っていた。金堂に戻り、前にある会津八一の歌碑を見て再び基壇に登り、「まろき柱」をためつすがめつ眺め入る。

帰りがけに出口の左奥に藤棚があるのに気付く近づいてみると、若葉の下に短めの房が垂れて上品な色合いの花が咲きはじめていた。